

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。滋賀大学でのこれからの生活に期待をふくらませているものと思います。また皆さんのご両親やご家族もさぞかしおよろこびのことと思います。桜も満開となり、皆さんの門出を祝っているようです。教職員一同、皆さんのキャンパスライフをしっかりと支えていきたいと思っています。大学や大学院で経験するさまざまな課題に積極的に取り組み、滋賀大学での生活を実り多いものにしていただくよう期待しています。

一方で、世界は未曾有の変化に見まわされており、今後を明確には見通せない状況となっています。一つはウクライナに対するロシアの侵略です。もう一つはもう 2 年間にもわたるコロナ禍の影響です。皆さんの未来を語ろうとする時、これらの話題を避けて通ることはできないと思いますので、今日はこれらの 2 つのことがらについて私の感じることを述べてみたいと思います。

まず、ウクライナに対するロシアの侵略です。2月24日にロシアがウクライナに侵攻しました。この日は歴史に刻まれる重要な日となるでしょう。侵攻当初、数日でキーウ(キエフ)が陥落するともいわれていましたが、開戦後1か月をすぎてもキーウが陥落することはなく、逆にロシア軍側に大きな損害が出ていると伝えられています。ウクライナの状況がどのように収束していくかは全く予断を許しません。毎日報道される状況に皆さんも心をいためていると思います。一日も早い平和の回復を祈っています。皆さんはこの歴史的なウクライナ侵略の年に大学に入学したことを記憶に刻むことになるでしょう。

この事件について、私には二つの大きな驚きがありました。一つ目の驚きは、まるで時代が100年近く戻ってしまったかのような全面的な領土の侵略でした。二つ目の驚きは、ウクライナの粘り強い抵抗です。

まず一つ目についてです。人々の平和への願いを踏みにじるようなロシアの侵略は、人道的に許されるものではないとして、ただちに多くの国がロシアを非難する声明を出し、一致して厳しい制裁措置を発動しました。日本の国会でも、3月1日に衆議院で「ロシアによるウクライナ侵略を非難する決議案」が採択され「力による一方的な現状変更は断じて認められない。」とされました。滋賀大学も3月8日に声明を発表しました。

二つ目の驚きは、予想外のウクライナの善戦です。これは戦況の見通しに関する判断の誤りです。ロシアは侵攻後数日のうちにキーウを占領し、ウクライナ政府を崩壊させることができると判断していたと考えられます。しかし、事実としてはそのようになりませんでした。ウクライナ側はしばらく前からロシアの侵略を予測し準備を進めていたのでしょうか。私は軍事の専門家ではありませんので、両国の力の差を客観的に評価することは困難ですが、ウクライナ側の戦術の有効性が感じられます。

ロシアとウクライナで明らかな差が見られるのがインターネットを用いた「情報戦」です。ロシアは、国内の異論を抑えるため、インターネットなどの国外からの情報を遮断し、国民に正しい情報を伝えていないように思われます。一方でウクライナは、民間を含めてデジタル技術を有効に利用しています。その最も印象的な例が、ゼレンスキー大統領による各国議

会に対するオンライン演説です。私はアメリカ議会での演説と日本の国会での演説を聞きました。アメリカ議会での演説では、ウクライナの破壊の映像が非常に印象的に使われ、直接的な軍事支援の要請がおこなわれました。一方日本の国会ではそのような直接の支援要請はなく、日本の国情にあわせた演説となっていました。ウクライナのデジタル技術をフルに利用したプレゼンテーション能力が際立っています。

以上ウクライナ侵略の二つの驚きについて述べましたが、この二つは異なる性質のものです。あとで大学の教育に関してもそれらの違いについて述べたいと思います。

次に世界的なパンデミックとなった新型コロナについて考えてみたいと思います。2年前の冬に突然始まった新型コロナウイルスの感染は、大学の活動にも大きな影響を与えています。この入学式も、以前であれば新入生全員が一堂に会するものでしたが、昨年以来3回に分けておこなわれています。2年前の入学式は残念ながら中止となりました。学生生活の面でも、この2年間クラブ活動が制限されるなど、不自由な生活となっています。

2年前の感染当初は新型コロナウイルスについて多くの情報が得られておらず、非常に慎重な対応をせざるを得ない状況で、入学式も中止としました。教員は講義のオンライン化に追われ、キャンパスへの学生の立ち入りも制限されました。2年前の新入生は春学期中はほとんど大学に来る機会がありませんでした。その秋には、いったん小康状態となりましたが、昨年春には変異株であるデルタ株が流行しました。昨年春以降はワクチン接種が進み、デルタ株にも有効で、昨年秋には感染者が急激に減りました。しかしその後この1月頃に次の変異株であるオミクロン株が出てきて、また感染が拡大しました。このように状況がめまぐるしく変化しました。このような経過は皆さんも記憶に新しいことと思います。今後また新たな変異株が出てくる可能性も排除できませんが、オミクロン株と同程度でとどまってくれば「ウィズコロナ」という言葉に表されているような一定の落ち着いた段階になることが期待されます。ヨーロッパやアメリカでは、そのような前提のもとで活動制限を解除しはじめています。それにしても、この2年間のコロナ禍の中で、芸術などの文化的な活動が制限されました。また観光や飲食など一部の業種に大きな影響が出ました。学生の方々にとっても、友達作りや友達と語り合うという大学生活ができなかったことは、大変残念なことであると思います。

一方で、コロナ禍により社会の変化が加速されたというポジティブな面があることにも注目する必要があります。コロナ禍の中で必要にせまられて、大学ではオンライン授業がおこなわれ、企業では在宅勤務がおこなわれました。それらはデジタル技術によって可能となったことです。そして仕事の仕方が大きく変わりました。印鑑の廃止が一つの象徴的なことです。仕事上に必要な情報が紙で管理されていて、職場に行かないと情報が確認できないようでは、在宅勤務はできません。情報をデジタル化して、オンラインでアクセスできるようにすることが必要です。このようにしていわゆるデジタルトランスフォーメーションが急速に進展しました。

コロナ禍によって活動が制限される中で、オンラインで済む用事と対面が必要な用事の

区別を考えるようになりました。前者はオンラインで済ませることによって働き方の効率化がはかれます。このように、困難が進歩をもたらすという面があります。

また学生の就職活動も変わりました。コロナ前は、大都会にでかけて企業を訪問するという就職活動のスタイルでしたが、面接などがオンラインとなりました。これは実は地方大学の学生にとっては、都会の学生と比べて相対的に有利なことです。コロナ禍の中で、都市への人口集中の脆弱性も明らかとなり、地方創生の動きも促進されるものと思います。

以上、現時点の重要な問題となっているウクライナ侵略とコロナ禍について述べてきました。ここで、このような状況の中で、大学で学ぶべきことに戻って考えてみたいと思います。

まず、ウクライナ侵略に関して、人道的な判断と事実の判断の違いについて述べました。大学で学ぶ学問は、基本的には、自然や社会の事実に関する理論や思考方法を整理したものであり、事実に関する判断を助けるものです。古典的な例として、天動説と地動説の違いを考えてみましょう。学問的な観点からは、どちらが事実であるかのみが問題で、それぞれの価値には関心がありません。学問は「没価値的」と言われることがあります。自然を対象とする自然科学は特に没価値的とされます。人間や社会を対象とする人文科学や社会科学では、価値判断を完全に切り離すことは困難ですが、これらの学問でも議論の客観性を最も重視します。この意味で、大学でまず学ぶべきことは事実を正しく判断できる能力であると言えます。そのために、皆さんには広くかつ深く学問をおさめ、没価値的な学問の方法論にも慣れてもらいたいと思います。一方で、ウクライナの状況が示しているのは、我々は個人として、倫理的な判断を迫られる重要な場面に直面することがあるということです。このことは「熱い心と冷たい頭を持つ」、英語では“cool head, but warm heart”、と表現されることがあります。イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルのことばです。

またコロナ禍のこの2年間は、我々に未曾有の不確実性をつきつけました。その中で求められた能力は、状況に応じて対応を変更できる柔軟性です。また毎日報道される感染状況などのデータに注意し、適切に行動することも求められました。滋賀大学では、このような柔軟性やデータに基づいて行動できる力を育てる教育を重視していきます。

大学の教員は、それぞれの分野の学問をおさめ、その学問の成果を皆さんに伝える役割を持っています。それらの成果は、正しい事実判断をするための基礎となります。一方で、最近起きている未曾有の変化について教員がすでに答を持っているわけではありません。これらについては、教員も皆さんと一緒に考え、学んでいく必要があります。

滋賀大学の今年度からのキーワードは未来創生大学です。皆さんが滋賀大学で学ぶなかで、自分と社会の未来について考え、未来を切り開く人材に育ってくれることを願っています。

令和4年4月4日

滋賀大学長 竹村彰通